國學院大學学術情報リポジトリ

Re-reading the Chapters “Kourobou-no-yuki" and “Sangatsubakari" in Makuranosoushi

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Tsushima, Tomoaki
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000256

『枕草子』「香炉峰の雪」と「三月ばかり」の段を読み直す

津島知明

はじめに

「雪のいと高う降りたるを」と書き起こされる、いわゆる「香炉峰の雪」の段は枕草子を代表する章段のひとつである。いかにも「清少納言らしい」逸話と解されるためか、教科書にも長く採録されてきたが[1]、現在の新学習指導要領でも状況は変わらないことが報告されている[2]。一方、知名度と分量の割には語釈上の異説が多いため[3]、今も議論が尽きない章段でもある[4]。ここでは本段をめぐる諸問題を検証するとともに、続く「三月ばかり」の段と合わせて、雑纂本の配列が両段に託した役割についても考えてみたい。

一、事件時の問題

まずは二八二段の全文を引く[5]。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて炭櫃に火おこして物語などしてあつまりさぶらふに、「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げ

させて御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。人々も「さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人にはさべきなめり」と言ふ。

中宮定子と過ごした大雪の日の一齣が記されているが、早くから「年時を推定する根拠はなにもない」とされてきた。[6] 裏を返せば、時も場所も特定させない描き方が選ばれているわけで、そもそも年時の詮索に意味はないのかもしれない。諸注を通覧しても事件時に言及するのは少数派で、まとめれば次の二説に絞られる。

A長徳三（九九七）年か四年の冬、職の御曹司での出来事か（『全講』）

B正暦五（九九四）年晩冬から翌長徳元年早春、登花殿での出来事か（『集成』）

近年では「正暦五年の冬か」とする『新全集』『学術』、「長徳四年十二月の大雪の時か」とする『新編』があり、前者はB期、後者はA期に含まれる。[7] いずれも推定の域は出ないが、引用された詩が白楽天の左遷中の作であることから、Aは「内裏を出てわびしい日々を送られる今の中宮の心」などと重ねられてきた。[8] Bならば、さしあたり「わびしさ」とは無縁となる。注4に引いた今井論文には、職での暮らしにこの詩を重ねるのは「無残な気がするし」、女房の評も長徳四年末なら「切実過ぎる気がする」という理由から、本段を「正暦五年末の話とみたい」とあった。ただそれは、だからこそ時と場所を捨象して描いたとも説明できるし、A期でも長徳四年末ならば中宮は直後に還御を果たす。引詩を（読み手のコンテキストとしては）白楽天が「やがて召還される長安」を詠んだ詩と意味付けることも可能となる。いずれにせよ、職時代だから一律に「わびしい」「無残」とは見なせない。また「左遷中の詩句」という括りでは、職にあって琵琶行が引用される場面が、既に九七段に描かれていた。

旧稿にて触れたように、[9] 清少納言の宮仕え期に「大雪」の記録が残るのは、（1）長徳四年十二月十日（権記）（2）長保元年十二月二十日（権記）（3）翌二年正月十日（御堂）しかない。これ以前は記録に欠落が多いので実態は不明とするほかないが、日記回想段に記された降雪も、初出仕頃（一七八段）と雪山の段（八四段）と本段のみで、決して多くはない。降雪日の御在所は（1）ならば職、（2）（3）ならば生昌邸となる。後

者は第一皇子の誕生間もない（彰子立后が進められていた）時期にあたり、「物語などしてあつまりさぶらふ」本段の雰囲気にそぐわない気はする（むろんこうした一日がなかったとは言えない）。前者ならば、大雪が衆目を集めた八四段の日々に含まれることになる。だとすると「香炉峰は職御曹司の雪山」だった（『新編』）との指摘が注目されるが、八四段の「十余日」は雪山を作らせた日と思われ、おそらく降雪日（十日）にはまだ築かれていない。雪山と関係付けるなら、「香炉峰」が幻視されたその庭に後日「まことの山」が築かれた次第となる。

現存記録から裏付け得るという条件のもとではあるが、ここでは本段の「大雪」も長徳四年十二月十日の可能性が高いと見ておく。[10] ただし年時の特定自体が目的ではない。そう見なすことで得られる情報が、以下の解釈にも参考になると思われるからである。

二、「例ならず」の解釈

事件時以上に、本段で大きな問題とされてきたのは「例ならず御格子まゐりて」の解釈である。『春曙抄』が「常は雪の物見に格子を上ぐるに、今日は寒気故、御格子の下ろされたる也」と注して以来、数々の説明がなされてきた。諸説を詳細に検証した三保忠夫の論考では、『新大系』までの「例」の解釈が次のように分類されている。[11]

①雪が積もった時には御格子を上げるのがいつもの例である。
②朝には御格子を上げるのがいつもの例である。
③夕には御格子を下ろすのがいつもの例である。

①（『春曙抄』）は最も多くの注釈に踏襲されている説。しかし三保は、格子の上下は毎日の恒例であり雨や雪に左右されないことを検証して、この解を斥けた。③（『集成』ほか）についても、一旦は上げた格子を（寒いので）下ろして再び上げるという状況は、風流に程遠い（降雪を女房たちも見ていることになり、中宮の質問が気の抜けたものとなる）という理由で否定している。②は『精講』などに可能性として示された説だが、三保はこれを採って「例ならず」を「定時に格子を上げずに」と結論付けた。上げなかった（下ろしていた）理由については、①②③を問わず「清少納言を試すため」とする解釈が多いが（『松田評解』『新大系』『新全集』など）三保はこれを「深読み」と

して斥け、「女房達が寒さに震え上がっていたから」とする。さらに中宮は「この朝、寝過され、御帳からおでましになるのが遅れたのではないか」、そのような「中宮を気遣って」上げなかったのだろうとも推測している。

上格子下格子が（御在所がどこであれ）恒例の日課であることは三保の指摘する通りだろう。雪の朝の例としては、一七八段に見える上格子が傍証となる（登花殿）。しかし三保説によれば「少納言よ」という発話の前に「寝ていた中宮がおでましになって」という経緯があったことになる。だが本文による限り、中宮もその場にいたと解すのが自然である。そして中宮の御前であれば、女房達の意向だけで格子の上下がなされるとは考えにくい。この点は、前掲今井論文が源氏物語の例からも検証している所である（よって今井論は③説）。ここで先述のように、事件時を長徳四年十二月十日と仮定してみる。すると当日は朝からの降雪で（権記）雪が「縁」にまで降り積もっていた（八四段）。職では中宮は南廂に、女房は又廂（孫廂）で暮らしていたという（七五段）。その状態が続いていたとすれば、たちまち雪は縁から吹き込んでこよう。一度は定刻に上げた格子だったが、中宮の了承も得て「例ならず」下ろすことになった。この日が異例の大雪だったからで、単に「寒気も強かった」（『解環』）とか「雪続きに飽いて」（今井）という理由ではなくなる。以上が長徳四年末と見なした場合の想定だが、他所であったとしても「雪のいと高う降りたる」日であれば（程度の差はあれ）似たような状況は考えられるのではないか。よって「例ならず御格子まゐりて」は、例ならぬ大雪に定刻の下格子を待たずに下ろしていた（③説）と解したい。

なお「高う降りたるを」の「を」も、諸注「逆接」「順接」「単純接続」と解釈が分かれている。これは「例ならず」の理解と連動しており、①説なら「雪が降り積もっているのに」、②説なら「降り積もっているので」となるわけだ。③説の『解環』は逆接で訳しているが、③ならば順接の方が妥当だろうか。だがそもそも順接逆接を明示したければ「降りたれば」「降りたれど」とあるべきで、ここは「降雪」をただちに「下格子」に直結させたくない意識が「を」を選ばせたと見ておきたい（雪好きを公言する書き手の心情の投影とも説明できる）[21]。従って単純接続が妥当か。冒頭部を現代語訳すれば、

雪がとても高く降り積もっているところ、いつもと違って（早めに）御格子を下ろして炭櫃に火をおこして（女房たちが）おしゃべりなどして集まって伺候していると、

となる。ちなみに「炭櫃に火おこして」は、集まっておしゃべりする女房たちが、火をおこした炭櫃を囲んでいるという状況を説明したもの。点火は朝になされていよう（初段）。

三、〈秀句モード〉の対話

続いて「香炉峰の雪いかならむ」との仰せに、御簾まで上げた「少納言」の応対が定子の笑顔を引き出している。「遺愛寺の鐘は枕に欹（よ）りて聴き、香炉峰の雪は簾を撥（は）ねて看る」（白氏文集・十六）に拠ることは明らかだが、「例ならず」を先のように解せば、格子を下ろしてしばらくしてから、いっそう高く降り積もったであろう雪景色が気になって、「見てみたい」と表明されたことになる。めったに体験できない大雪である。ここで眺めておかぬのは惜しい。その思いは「雪好き」の少納言ならわかるはず、というご指名だろう。「知識を試してやろう」とか「活躍の場を与えてやろう」といった、ことさらな作為は感じさせない。なお原詩「發簾」と「御簾を高く上げたれば」の語義については、中島和歌子の考証に詳しい[13]。「撥簾」は「さっとはね上げる」動作だが、枕草子の「高く上ぐ」は「簾を巻き上げて鉤にかける」意となる（『榊原新釈』も指摘）。簾を手で高く持ち上げてみせるというような得意然とした姿ではない。格子を上げただけでも中宮の意向に応えたことになるが、雪景色と直に対峙する場が提供された（室内の暖より風流が優先された）わけだ。「簾をまきあげて看る」（これが当時の訓と思われる[14]）なる詩句を意識してのことであろう。

最後は女房たちの「さることは知り～」という讃辞で結ばれる。その中にある「歌などにさへうたへど」は（『榊原新釈』や中島論文が指摘するように）和歌に詠むことを「うたふ」とする用例はないので、「歌謡にして歌う」（『新編』）の意となろうか。「さべき」は多くの注が「しかるべき」「ふさわしい人」「適任者」と解しているのに対し、『集成』は「そうあるべき」という女房の反省の弁とし、『学術』も従っている。しかし枕草子の「さべき」の用例に照らせばやはり「しかるべき、適当な」（『新編』）が妥当である。何が「さべき」かと言えば、格子を上げて雪が見えるようにしただけでなく（そこまでは容易に察しが付こう）、白詩を生かして簾まで巻き上げたプラスアルファの機転をさす（二一段の「君をし見れば」に通じる）。次段では、陰陽師に仕える小童が「例知り、いささか主に物言はせ」ず立ち働く様が「うらやましけれ」と評されているが、両者は通じ

合うものだろう。理想的な主従のあり方として、その以心伝心ぶりこそを二八二段は誇っているのだ。

ここまで枕草子には、定子との対話が数多く描かれてきた。なかでも評価され奨励されてきたのは、歌のやりとりも含む〈秀句モードの対話〉だった。[15] 三巻本によって一覧しておく。[16]

（1）九一段　清「なかば隠したりけむ」→定「別れは知りたりや」
（2）九六段　定「したわらびこそ」→清「ほととぎす」（連歌）
（3）九六段　定「元輔がのちと」（歌）→清「その人の後と」（歌）
（4）九七段　定「などかう音もせぬ」→清「ただ秋の月の心を」
（5）九八段　定「思ふべしやいなや」→清「九品蓮台の間には」
（6）一七八段　定「いかにして」（歌）→清「うすさこさ」（歌）
（7）二二三段　定「山のはあけし」→清「ならぬ名の」（連歌）
（8）二二四段　清「これませ越しに」→定「みな人の」（歌）
（9）二六一段　清「世の中の腹立たしう」→定「姥捨山の月は」
（10）二六一段　定「とくまゐれ」→清「かけまくも」（歌）
（11）二六二段　清「泣きて別れけむ顔に」→定「げに雨降るは」
（12）二六二段　定「花の心開けざるや」→清「秋はいまだしく」
（13）二八二段（本段）
（14）二八四段　定「いかにして」（歌）→清「雲の上も」（歌）

全十四例のなかで、特筆すべきは五例にも及ぶ漢詩を踏まえた応答（1・4・5・12・13）だろう。女性同士でありながら（連歌二例を含めた）和歌の贈答（2・3・6・7・14）と同数となっている（残る8・10はどちらか一方の詠歌、9・11は和歌を踏まえた秀句）。このような枕草子を象徴する対話が、九一段を嚆矢に散りばめられていることがわかる。その最後を飾るのが本段なのだ。言葉と言葉のやりとりではないが、定子の「笑は

せたまふ」という反応から、やはり〈秀句モードの対話〉が成立したと見なされる。漢籍を踏まえた応答の最後に、これまでに例を見ない対話の形が提示されているのだ。

四、二八二段から二八四段へ

さらに本段にはもう一つ注目すべき特徴がある。前掲の「人々」（女房たち）のコメントである。清少納言自身に向けられた女房のコメントが、直接話法で再現された現場は、以下の十例を数える。[17]

（ア）七段「つひにこれを言ひあらはしつること」
（イ）七九段「あなうれし」「とくおはせよ」
（ウ）八〇段「まづこれはいかに～」「誰も見つれど～」
（エ）九六段「なほそこに」「さして得たらむ人こそせめ」
（オ）九八段「一乗の法ななり」
（カ）一〇一段「あしかめり」「うしろめたきわざかな」
（キ）一七八段「見ぐるし、さのみやは～」
（ク）二六一段「いみじうやすき息災の祈りななり」
（ケ）二六二段「殿上ゆるさるる～」「馬さゑのほどこそ」
（コ）二八二段（本段）

文脈を見れば、「～など笑ふ」（ア）「～とて笑ふ」（ウ）「～など人々も笑ふ事の筋なめり」（オ）「～と笑へど」（ケ）と「笑い」を伴う例が多い。これらは「からかい」のニュアンスを帯びており、（ク）もそれに含まれよう。ほかは叱責（カ・キ）や仕事の押し付け（エ）で、歓迎を表明した（イ）のような例は珍しい。つまり、清少納言を称えるようなコメントは本段が最初で最後なのだ。[18] かつて一三八段では同僚との深刻な軋轢も語られていたが、女房からのコメントの綴じ目に、最高の讃辞が用意されたことになる。自讃的な側面は確かに認められよう。ただ従来はその点ばかり強調されてきた嫌いがある。この問題に関しては改めて後述したい。

二八二段は先述のように、定子との漢籍を踏まえた対話の最後を飾っていた。そして、定子との対話が本編最後に描かれるのが、後続の二八四段である（前掲14）。その二八四段との間には、次のような短い文章が挟まれていた。

陰陽師（おんやうじ）のもとなる小童（こわらは）べこそ、いみじう物は知りたれ。祓（はらへ）などしに出（い）でたれば　祭文（さいもん）など読（よ）むを、人はなほこそ

聞け、ちうと立ち走りて「酒、水いかけさせよ」とも言はぬに しありくさまの、例知り、いささか主に物言はせぬこそ うらやましけれ。〈さらむ者がな 使はむ〉とこそおぼゆれ。（二八三段）

先に触れたように、主人の意を汲んで「例知り」「主に物言はせぬ」まま立ち働く童を記したもの。前段に描かれた阿吽の呼吸を主従一般に広げて、使う側の立場から評したことになる。[19]その直後、次のような光景が登場する。

三月ばかり、「物忌しに」とてかりそめなる所に人の家に行きたれば、木どもなどのはかばかしからぬ中に、柳といひて例のやうになまめかしうはあらず、ひろく見えてにくげなるを、「あらぬものなめり」と言へど「かかるもあり」など言ふに、

さかしらに柳のまゆのひろごりて 春のおもてをふする宿かな

とこそ見ゆれ。

ある年の三月、物忌みで出掛けた時のこと。広がって見えた柳の葉に「春の『おもてをふする』（面目をつぶす）宿であるよ」と詠んでいる。一見他愛ない逸話だが、この「面伏せ」こそが本段のモチーフであることが最後に明らかになる。[20]場面はこう転換してゆく。

そのころ、また同じ物忌しにさやうの所に出で来るに、二日といふ日の昼つ方、いとつれづれまさりてただ今もまゐりぬべき心地するほどにしも、仰せ言のあればいとうれしくて見る。浅緑の紙に宰相の君いとをかしげに書いたまへり。

同じ頃、同じ事情で滞在した家での話。よってこれも季節は晩春、日暮れまでが長く感じられる頃である。その「つれづれ」に耐え難くなっていた矢先、定子の仰せ言が代筆した宰相の私信とともに届けられた。うれしさのあまり物忌みも無視して開いてみると、

いかにして すぎにしかたをすぐしけむ くらしわづらふ昨日今日かな

となむ。わたくしには、今日しも千歳の心地するに暁に

はとく。

とあった。この歌は千載集に「一条院御時、皇后宮に清少納言初めて侍りけるころ、三月ばかり二、三日まかりいでて侍りけるに、かの宮よりつかはされて侍りける」という詞書と共に見える。ここから事件時を特定する試みが『金子評釈』以来なされており、今日では「正暦五年三月か」（『大系』）に従う注釈書が多い。同時に歌にある「すぎにしかた」も、「そなたが出仕する以前の昔の日々」（『集成』）と解されている。事件時を特定しない諸注でも、やはり「あなたと逢う前は」（『新全集』）などと訳され（『角川』『全注釈』『新大系』『学術』ほか）通説となっているようだ。だがこうした理解は妥当なのか。次節で検討してみたい。

五、二八四段の応答

ここで本文から確認できる年時は「ある年の三月」のみである。歌の趣もまずはそこから読み解くべきだろう。「くらしわずらふ」とは従って「日暮れまでの時を過ごすことに難儀する」意となり、「二六二段と同じく『君を思ひて春の日遅し』（文集・十二・長相思）に拠る」（ともに『新編』注）歌句と見なされる。この点については圷美奈子にも詳しい論考があり、[21] ここでは清少納言の不在が「春の日長をいよいよ切実に長く思わせる」という心情が詠まれていること、本文にない「出仕前」を持ち出して解する必然性はないことが指摘されており、同じく首肯されよう。

千載集の「初めて侍りけるころ」は、事件時の推定としては妥当なのかもしれない（それを積極的に否定する材料もない）。だが詠まれているのは、あくまでも清少納言退出後の「昨日今日」の暮らし難さである。そこから共に過ごした「すぎにしかた」（退出前の日々）に思いを馳せているのだ。そなたの退出前、この春の日をいったいどのように過ごしていたのか（わからなくなるほど昔のように思われる）。そなたのいない「昨日今日」があまりに長く感じられるから——という対比だろう。なお「すぎにしかた」は他に二例、ともに地の文に見られる。

過ぎにしかた恋しきもの　かれたる葵（あふひ）　雛遊（ひひな）びの調度（てうど）。
（二八段）

月の明（あ）かきはしも、過ぎにしかた行末まで思ひ残さるること
となく心もあくがれ、（二七六段）

どちらも、年を越えて遡るような過去時が想定されようか。諸注の「出仕以前」という解釈は、こうした語感にもひかれたのだろう。確かに通常の会話なら、わずか二日前を「すぎにしかた」とは言わないかもしれない。だがここは、退出前の日々をあえてそう呼ぶことで「昨日今日」の時の長さを誇張しているのだ。待ちわびる思いを伝えるために。宰相の「今日しも千歳の心地する」も同趣である。

返信は次のようになされたという。

雲の上もくらしかねける　春の日を　ところがらともながめつるかな

わたくしには、今宵のほども「少将にやなりはべらむ」とすらむ。

こちらでも春の日長を暮らしかねていました。所在なさを「所がら」（見所もないこの家）のせいにして——。だが以下に記されるように、この歌は大変な不興を買うことになる。また「わたくしには」以下は宰相への私信だが、「少将」が何者かがわからない。『春曙抄』が「深草少将」をあげ、諸注はそれに拠るか参考として引いている。だが百夜通い伝承との重ね方が難しく、さらにその伝承が同時代に確認できないこともあり、決定打とはなっていない。諸注はとりあえず「あの少将のようになってしまうのではないかという気がいたします」（『角川』）「ひょっとしたら『少将』になろうか、ということでございます」（『新全集』）などと訳している。ただ、「～むとす」までは「（少将に）なろうとする、なろうと思う」と解すとしても、一文を結ぶのは「らむ」である。押さえるべきは、これが宰相の「暁にはとく」への返答であり、実際に「暁に」参上している点だろう。「らむ」（現在推量）を用いることで、文を受け取った時点の宰相に推量させるという体で、おそらく自身の予定を伝えているのだ。「（あなたが文を受け取るであろう）今宵にも」「（自分は）～しているだろう」。「少将になる」の意味するところは、出立の「慌ただしさ」「必死さ」、相手の意向に対する「忠実さ」「誠実さ」などが想定できようか。大意としては「（あなたのお言葉通り）今宵の内に出立しましょう」となるのだろう。

六、歌句の不評

暁にまゐりたれば、「昨日の返し『かねける』いとにく

し。いみじうそしりき」と仰せらるる、いとわびし。まことにさる事なり。

二八四段の結びである。返歌の「（くらし）かねける」が定子から駄目出しされている。清少納言への言葉としては、最も厳しいものとなる。ここも諸注、なぜ「いとにくし」とまで批判されたのか、「いみじうそしりき」の主語は誰かで、解釈が分かれている。前者については「あまりにうけばりたる事とたはぶれの給ふ也」（『春曙抄』）以来、「独断的な言いぶり」（『精講』）「思いあがった態度」（『旺文』）「生意気」（『角川』訳）「自負の態度」（『和泉』）「自負心過剰で失礼」（『新全集』）など、思い上がりや非礼を指摘するものが最も多い。根拠としては、定子の歌を「奪胎して返歌したから」（『塩田評釈』）、その上「臣下の身で肯定的に受けとめているから」（『旺文』）、「中宮のお世辞をそのままとったから」（『和泉』）等の説明もある。

一方、具体的に歌句の不備を指摘する論がある。『解環』は問題を「和歌表現としての語法上の適否」に絞るべきだとして、「『ける』が推量伝聞の作用をしているので、中宮のお気持ちが十分にわかっていないことになる」（『集成』に同じ）と説く。「ける」を問題視するとしても「推量伝聞の作用」という理解は特異であり、従えない。ほかに「『けり』の用い方で失敗した」（『ほるぷ』）とするものに、「推量の言い方にでもすればまだいくらかよかったのだろう」（『研究』）「婉曲に『かねけむ』とあったらよかったのに」（小島俊夫[22]）等があり、また「けり」を「気づき」と解して「宰相の伝言ではじめて中宮の寂しさに気づいたことになるから」（『ほるぷ』『新全集』）という指摘もある。どれも「推量伝聞」説よりは穏当と思われるが、ここは「ける」の適否というより、やはり「かねける」の問題として考えるべきではないか。

かつて岸上慎二に「『暮らしわづらふ』と『暮らしかねける』とでは『暮らす』状態に大きな差がある」という指摘があった[23]が、どのような「差」なのかまでは言及がない（『大系』には「かねける」は「はっきり断言しすぎている」との注がある）。また『新大系』には「かねける」は「何かをしようとして出来ないことを表す」ので、ここは「中宮の能力不足を言ったような響きを伴う」とある。実際のところ「くらしわづらふ」と「くらしかねける」にどれほどの差異があるのか、厳密には判断が難しいが（辞書類では「～わづらふ＝できずに困る」「～かぬ＝できない」と訳し分けるものもある）、定子がかくもこだわるからには、おそらく後者の方が直接的で、相手の心情を言う

には不適切だったか。ただし問題の本質は、あくまでも定子歌と並べた時に、この歌句がもたらす意味作用にあると思われる。

清少納言は、定子の「くらしわづらふ昨日今日かな」への感激と共感から、ついそのまま「雲の上もくらしかねける」と受けてしまった。「所在ないのは自分だけでなく、中宮様も暮らしかねていることよ」と、ここ（二句目）で詠嘆しているような印象を与えるのだ。次に「春の日を」が来るので「かねける」は連体止め（二句切れ）ではなく、三句切れに結果としては落ち着くのだろうが、誤解を招きやすい詠みぶりと言えよう。しかも暮らし難さの原因が「自分の不在」であってみれば、まさしく「うけばりたる」（憚りのない）物言いとなってしまう。ただおそらく定子は、単にそれを「失礼だ」と責めたわけでも「戯れて」言ったわけでもあるまい。自分に仕える者として、歌句の一字一句にまで神経を通わせねばならないという（他の女房も意識した）教育的指導だろう。二一段に描かれているように、定子には目指すべき宮廷文化のレベルについて、明確かつ高い意識があった。その実現に欠かせない人材、清少納言への期待の程がここには示されているのだ。

最後の「そしりき」の問題は、『金子評釈』が「女房達が也」として以来、『精講』『全講』『和泉』『新全集』『学術』なども従っている。一方「皆して」（『角川』）「みんなで」（『ほるぷ』『全注釈』）といった訳は、中宮を含む「皆」と解せようか。「中宮や女房が」と明記するのは『新編』。また『新大系』は「私をひどく悪く言ったものね」と、その場で清少納言に向けられた文句と見ている。これは「昨日の」事を語る発話なので、「そしりき」は歌を受け取った時（過去）に「非難した」事実を伝えていよう。『新大系』の解釈は、「（昨日）非難した」という言い方が、相手を前にした発話にはなじまないと考えたからだろう。そこから主語を「女房」とする解釈も出てくるのだと思われる。だがここは「いとにくし」という強い感情語を受けており、「そしりき」の主体にはやはり発話者が含まれよう。よって、自分はもちろん皆の評判も悪かったというニュアンスが、「いみじうそしりき」には込められていると見ておきたい。訳すなら「（皆で）たいそう非難した」がふさわしい。そして何より注目すべきは、これが「この宮の人にはさべきなめり」と結ばれた二八二段とは、正反対の評価となっている点だろう。

七、終幕を飾る二章段

定子が他所の清少納言に文を遣わす場面は、八三段を嚆矢に、

ここまで六例が描かれてきた。

（A）八三段「とくまゐりね～」「いみじく思へるなる～」（里へ）
（B）八四段「さて雪は今日までありや」（里へ）
（C）一三八段「いはでおもふぞ」（里へ）
（D）二二六段「山ちかき人あひの鐘の～」（清水寺へ）
（E）二六一段「とくまゐれ」（里へ）
（F）二六二段「花の心開けざるや」（里へ）
（G）二八四段（本段）

すべて帰参を促されるか、帰参につながるやりとりである。A・B・C・F・Gではその後の帰参までが描かれ、Dは返事をしたためる場面で終わるが、ほどなく帰参したのだろう。帰参まで月日を置いたと思われるのは、訳ありの里居（注7論文参照）だったEのみである。かくて二八四段は、定子との〈秀句モードの対話〉（1～14）の最後を飾るのみならず、文のやりとりの最後にして、帰参をめぐる逸話の最後にもなっている。三巻本ではこれ以降（跋文を除けば）定子との直接対話は描かれない（能因本はGの後にDを置く）。

先に二八四段のモチーフが「面伏せ」だと述べた。それは、前半で某家の柳を「春の面を伏する」と難じていた当人が、後半では「面伏せの歌」（『新編』）を詠んでしまうという顛末をさす。そしてその「面伏せ」こそは、右の（A）に初めて見える語彙でもあった。[24]

「いみじく思へるなる仲忠が面伏せなる事は、いかで啓したるぞ。ただ今宵のうちに よろづの事を捨ててまゐれ。さらずはいみじうにくませたまはむ」となむ 仰せ言あれば、「よろしからむにてだにゆゆし。まいていみじうとある文字には、命も身もさながら捨ててなむ」とて まゐりにき。（八三段）

引用箇所の前には、定子への「御前にも『なかなるをとめ』（うつほ物語・仲忠の歌）とは御覧じおはしましけむ」という返答がある。右はそれを受けて、自分を天女に見立てるなんて仲忠の「面伏せ」になるではないか、と切り返している。それはそのまま帰参の催促となり、直ちにそれは果たされた。「いみじうにくませたまはむ」という事態が、八三段では帰参によって回避されている。一方の二八四段では、帰参は果たすも「いと

にくし」「いみじうそしりき」という厳しい駄目出しが待っていた。両段の顛末は好対照である。かくて三巻本の帰参章段群（A～G）は「面伏せ」に始まり「面伏せ」に終わる。そしてどちらにも、返答の一字一句にまで目を光らせる定子の姿が描かれているのだ。

改めて二八二段と二八四段の位相をまとめておく。定子と交わした数々の〈秀句モードの対話〉（1～14）は随所に散りばめられていたが、二八二段は定子との「漢籍を踏まえた対話」の最後となり、これまでにない「言葉によらない応答」が記された章段だった。その意味で〈秀句モードの対話〉のひとつの到達点が示されている。二八四段は「帰参を促された逸話」の最後にして、定子との歌の贈答の、つまり〈秀句モードの対話〉の最後を飾る章段だった。両段とも定子とのやりとりに焦点を当てるが、前者には女房からの最初で最後の賞讃が記され、後者は定子の最も厳しい叱責で結ばれている。まったく対照的な逸話だが、併せて読むことで見えてくるものがある。二八二段はいわば、「この宮の人」に何が求められているのか、それを共有する女房集団なるものを描いていた。だがそうした価値観は、最初から「人々」に浸透していたわけではあるまい。二八四段に描かれた主従のやりとりを見れば、それこそは定子主導のもと、折々なされてきた研鑽の賜物だったことが想像される。自身の才を誇るというよりも、改めて定子の存在を際立たせる構成と言えよう。

例えば教科書のように二八二段だけを取り出して読むと、両段に託された終幕としての意味合いは、まったく無化されてしまう。むろん切り離しても鑑賞は可能だし、教材としての需要には十分応えているのだろう。[25] だがそれが一面で特定の読みを助長してきたことも確かである。何しろ教材に選ばれる日記回想段には、「くらげの骨」（九九段）であれ「少し春ある心地」（一〇三段）であれ、同じ事情が指摘できるからだ。教室で枕草子が「清少納言の自慢話」として片付けられやすいのは、そう読んでくださいと言わんばかりの体裁に負う所も大きい。日記回想段にはそれぞれ、雑纂本の配列によってこそ浮かび上がる意味もあるはずなのだ。[26]

八、おわりに

年時のわかる最終記事（一〇三段）などから判断すれば、枕草子は寛弘年間にまで手が加えられている。道長の全盛期、定子後宮の記憶が「過去」となりつつあった頃である。やがて勝

者側の欲する「歴史」は、定子後宮の輝きを無いことにする、あるいは「あはれに悲しき」物語に回収しようとする、紫式部日記や栄花物語のようなテキストに結実してゆくことになる。[27]

そのような時期に、かつての定子後宮の記憶を差し出してみせたのが枕草子だった。「香炉峰の雪」も「三月ばかり」も、それだけを取り出せば、何気ない日常の一齣、他愛ない「自讃談」「失敗談」かもしれない。だが、見てきたように雑纂本の配列と構成は、二八二段が示した「この宮」を象徴する到達点が、二八四段に描かれるような日々の研鑽の賜物であることを、そこに導いた定子の存在とともに強く印象付けていた。執筆時たる「今の世」（二六二段）から振り返ったとき、定子後宮の存在証明として、それらは外せない「日常」だったのだろう。少なくとも、「この草子」がなければ伝わらなかった光景であることは確かである。

注

（1）小森潔「教材としての香炉峰の雪の段」（『枕草子　発信する力』翰林書房・二〇一二、初出二〇〇三）に詳しい。

（2）東望歩「教科書のなかの〈枕草子〉」（『日本文学』二〇一四・一）。

（3）津島「枕草子主要章段研究展望・香炉峯の雪の段」（『國文學』一九九六・一）にて言及した。

（4）最近の論考には、今井久代「『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」段を読む」（『日本文学』二〇一六・一）がある。

（5）本文（三巻本）及び章段区分は『新編枕草子』（おうふう、二〇一〇）による。

（6）岸上慎二「枕草子の史実の文の年代について」（『枕草子伝記攷』畝傍書房、一九四三）。

（7）『阿部評釈』には「定子が悲境に入ってからの、長徳二年以降のことか」とある。同年冬は清少納言が里にあったと思われるので（津島「『枕草子』「殿などのおはしまさでのち」の段を読み解く」『古代中世文学論考』三二、新典社、二〇一五）、これも事実上A期に含まれよう。

（8）森本元子「日記的の章段の鑑賞」（『枕草子必携』学燈社、一九六七）。

（9）津島「〈大雪〉を描く枕草子」（『枕草子論及』翰林書房、二〇一四）。

（10）ただし長徳四年末の出来事だったとしても、時と場所を捨象する本段は、還御の物語（八四段）とは切り離されている。

（11）三保忠夫「枕草子『香炉峰の雪』」上・下（『国語教育論叢』一九九一・九、九二・八）。

（12）注9に同じ。

（13）中島和歌子「枕草子『香炉峯の雪』の段の解釈をめぐって」（『国文学研究ノート』一九九一・三）。

（14）注13に同じ。

（15）通常の対話に対し、何らかの技巧の加わった発話をさす。津島「秀句のある『対話』」（『國學院大學紀要』二〇一六・一）参照。

（16）一対一の対話ではないが、これらに先立つ二一段には定子後宮の指針となる象徴的な応答（君をし見れば）が記されている。

（17）直接のコメント以外では、一三八段に陰口と伝言、二二三段の噂話などが見え、特定の相手との文のやりとりは二六一段に見える。

（18）定子から直接「少納言」と呼ばれるのも本段が唯一の例。この点も含めて二八二段はかなり特異な章段と言える。

（19）本段も含む二八一段以下の繋がりについては、『新編』に「冬季の経験としての二八二段を挟み、二八四段まで陰陽道に関わる」という指摘がある。こうした微妙な連繋、特に二八三段の存在などは、いかにも「たはぶれ書き」（跋文）らしく装われた構成とも見なせる。

（20）「面伏せ」の後半との関わりは、松浦正治「枕草子の和歌機能」（『語文』一九九一・三）に指摘があった。

（21）圷美奈子「春日遅遅―『枕草子』「三月ばかり、物忌しにとて」の段の贈答歌」（『和洋女子大学紀要』二〇一〇・三）。

（22）小島俊夫「〈「かねける」いとにくし〉枕草子「三月ばかり物いみしにとて」の解釈をめぐる諸説について」（『奥羽大学文学部紀要』一九八九・十二）。

（23）岸上慎二「清少納言研究への招待」（『枕草子講座』一、有精堂、一九七五）。

（24）八三段との繋がりについては『新編』注に指摘がある。

（25）東（注2に同じ）は教材として好まれる理由として、文法学習に適している、漢詩学習と連繋できるといった点をあげている。

（26）九九段も一〇三段も、九六段から続く秀句をめぐる日記回想段群の一角を担っており、その配列には意味が見出せる（津島注15論文参照）。

（27）津島「奪回された〈定子の記憶〉」（『古代中世文学論考』三一、新典社、二〇一五）参照。

＊枕草子諸注釈に関しては、以下の略称を用いて引用した。

金子評釈　金子元臣『枕草子評釈』（明治書院、一九二一）

精講　五十嵐力・岡一男『枕草子精講』（學燈社、一九五四）

塩田評釈　塩田良平『枕草子評釈』（学生社、一九五五）

全講　池田亀鑑『全講枕草子』下（至文堂、一九五七）

松田評解　松田武夫『評解枕草子』（山田書院、一九五七）

大系　池田亀鑑・岸上慎二『日本古典文学大系 枕草子』（岩波書店、一九五八）

阿部評釈　阿部秋生『枕草子評釈』（東京堂、一九五八）

研究　佐伯梅友・石井茂『枕草子の研究』（績文堂出版、一九五九）

旺文　田中重太郎『現代語訳対照 枕冊子』下（旺文社、一九七四）

榊原新釈　榊原邦彦『古典新釈シリーズ枕草子』（加藤中道館、一九七六）

集成　萩谷朴『日本古典集成 枕草子』下（新潮社、一九七七）

角川　石田穣二『新版枕草子』下（角川書店、一九八〇）

解環　萩谷朴『枕草子解環』五（同朋舎、一九八三）

和泉　増田繁夫『和泉古典叢書 枕草子』（和泉書院、一九八七）

ほるぷ　鈴木日出男『枕草子』下（ほるぷ出版、一九八七）

新大系　渡辺実『新日本古典文学大系 枕草子』（岩波書店、一九九一）

全注釈　田中重太郎（他）『枕冊子全注釈』五（角川書店、一九九五）

新編全集　松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（小学館、一九九七）

学術　上坂信男・神作光一『講談社学術文庫 枕草子』下（講談社、二〇〇三）

新編　津島知明・中島和歌子『新編枕草子』（おうふう、二〇一〇、注釈は中島）

付記　本稿は、國學院大學國文學會春季大会・公開講演会（二〇一六年六月二五日）にて発表した材料を元にしています。